

近世文学資料解題

星 瑞 穂

はじめに

本稿は当館所蔵の資料のうち、室町時代後期～江戸時代に成立した文学作品（近世文学）の書誌解題である。広く一般の利用に供するため、作品解説を加えて掲載する。

今回は『改訂 内閣文庫国書分類目録』の「国文」の項目に挙げられている資料から、該当の資料を抽出して調査した。旧蔵者は紅葉山文庫・昌平坂学問所・和学講談所など多岐に及ぶ。

なお、挿絵を伴う資料については、すでに『北の丸』四五号（二〇一三）～五〇号（二〇一八）に「当館所蔵の「絵入り本」解題①～⑥」として紹介しているので参照されたい。

なお、丁付けについては、一丁目オモテ・一丁目ウラをそれぞれ「一オ」「二ウ」と表記し、丁数が進む毎に数字を加算していく。

【一】李娃物語 江戸時代前期写か 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇八七」

本資料は室町時代後期に成立したと考えられている御伽草子で、唐の伝奇小説『李娃伝』の翻案。一冊。袋綴。

舞台は南北朝時代。薩摩守の子中将安則は、和漢の学問に優れ、上京して勉学に励んでいた。ところが白拍子の李娃に入れあげ、資金をすべて失った上、もとより金の関係だけであつた李娃も姿を消してしまい、ついに安則は病に伏せる。怒った父の薩摩守は安則を打擲し、殺そうとするが、息を吹き返した安則は流浪の身となる。ある日、偶然にも李娃の家に着てきた安則。その哀れな姿を見た李娃は改心し、安則を手厚く看護し、さらには書籍を集め、学問に励ませる。とうとう安則は帝にも認められ、大納言に任官する。父とも再会して和解し、李娃を正式な妻として迎えると、五人の子に恵まれた。

安則が琵琶を奏でる李娃に心奪われる場面は、『太平記』巻一八「春宮還御事付一宮御息所事」および舞の本『新曲』において、尊良親王が今出川公頭の姫君の琵琶を弾じる姿に心惹かれる場面と内容・本文ともに酷似していると指摘されている。また説経「しんとく丸」との類似性も指摘される。（勝俣隆「李娃物語」（徳田和夫編『お伽草子事典』二〇〇二年、東

京堂出版)。

本資料の場合、内題・外題ともに李娃の「娃」の字を「蛙」に誤写している。

また一丁目オモテ(以下、「一オ」と表記する)に「和学講談所」の印があることから、和学講談所の旧蔵ということがわかる。

【書誌】

外題・「李蛙物語」 中央打付墨書

内題・「李蛙物語」

表紙・浅葱色地縹色横刷毛目表紙(二八・〇糎×二〇・五糎)

遊紙・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二二・五糎

匡郭・なし

墨付丁数・二五丁

印記・一オ「書籍館」「浅草文庫」「和学講談所」「日本政府図書」「内

閣文庫」

二五オ「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料には奥書がなく、写年・書写者ともに不明。

【二】うすゆき物語 延宝八年刊 二冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇八七」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」(『北の丸』四六号、一五七頁、二〇一四年) 参照のこと

【三】「尤の草紙」 延享四年写 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇九四」

本資料は斎藤徳元の手による仮名草子『尤草紙』の寛永一一年刊本を、延享四年に書写したもの。袋綴。一冊。

『尤草紙』は寛永年刊初期に成立したもので、『枕草子』のパロディである。「ものづくし」の趣向を真似て、八〇項目を立て、滑稽に仕立てたもの。例えば『枕草子』が「たのもしき物(心強く頼りになるもの)」に「心ちあしきころ、伴僧あまたして修法したる(具合の悪いときに、導師とたくさんの随伴の僧が法会で読経する)」と述べているのに対し、『尤草紙』は「名物の道具、人に不知持たる」「上手のくすし」「代つぎの子の器用なる(器用な跡継ぎの子)」といった具合である。

作者の斎藤徳元は美濃の斎藤道三の曾孫に当たる。岐阜に生まれ、武士として豊臣秀次らに仕えたが、寛永五年に江戸に下向してのちは初期江戸俳壇の中心的人物となった。正保四年に八九歳で没。

本資料は紺色表紙を持つが、これは後補で、元表紙は遊紙の次の丁にある。この解題では、扉として扱うこととし、墨付丁数では一オとして数えている。ここには左肩に「尤之草紙 全」と打付書があるが、元題簽が脱落した跡がある。日焼けの跡を計測すると、二〇・三糎×三・三糎の題簽であったようだ。

行数にばらつきがあり、序文は毎半葉二一行であるが、本文部分は毎半葉二行〜一四行である。

本文冒頭部分にあたる二才に「和学講談所」の印があり、和学講談所の旧蔵であることがわかる。

【書誌】

外題・「尤草紙」 左肩無地料紙題簽（二六・六糎×三・二糎）に墨書

内題・なし

表紙・紺色表紙（二五・八糎×一八・〇糎）

遊紙・なし

扉・「尤之草紙 全」 左肩打付墨書

料紙・楮紙

行数・序文・毎半葉二一行、本文・毎半葉二行〜一四行

字面高さ・二三・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・四二丁

印記・二才「書籍館」「浅草文庫」「和学講談所」「日本政府図書」

「内閣文庫」

四〇ウ「内閣文庫」

【写年・書写者】

四〇ウに以下の通り奥書がある。

「寛永申戌六月吉日書舎中野氏道伴刊行 後延享四年丁卯夷則写」

これによれば寛永一一年、京の書肆である中野右衛門尉（道伴）によって刊行されたものを延享四年に書写したことがわかる。

また四一ウ左下に以下のような墨書がある。

「権文■戲書之（花押）／墨付紙■十九丁」

※■部分は墨および虫損により判別不可能。ただし、元表紙の部分を丁数に含めなければ、墨付丁数は三九丁なので、最後は「三」の字が入ると思われる。

【四】尤之双紙 慶安二年刊 一冊

青山堂枇杷麿旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇九三」

本資料は前掲資料と同じ仮名草子『尤草紙』の慶安二年刊本である。

袋綴。一冊。

一才〜ウにかけて「枕を折て尤とは尤ならぬ文字／なれどもこれもまた古くさし」で始まる大田南畝の識語があるのが特徴。

見返しには南畝と親交の深かった青山堂枇杷麿の蔵書印があり、彼の旧蔵であったことがわかる。狂歌師として知られるが、江戸小石川の本屋でもあり、通称を雁金屋清吉。蔵書家としても著名。

なお、表紙右肩には「番外書冊」の墨印がある。これは昌平坂学問所が分類に用いていたもので、本資料が青山堂枇杷麿のもとから昌平坂学問所へ移ったことがわかる。

また本資料は香色の帙（二五・〇糎×一九・〇糎）に入れられている。左肩に無地の題簽（二六・七糎×三・三糎）で「尤之双紙」と出している。

中央に無記載の題簽（二〇・〇糎×一一・一糎）が貼られている。わずかだが卍字繫地唐花文様が残っている。

【書誌】

外題・「尤草子」 左肩打付墨書

内題・「尤之双紙」

表紙・朱色花文亀甲繫艷出表紙（二四・五糎×一八・二糎）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二一・五糎

匡郭・四周单边（二一・五糎×一六・五糎）

墨付丁数・八二丁

印記・表紙「番外書冊」

見返し「青山居士千卷文庫」「青山堂」「酔竹酔門」「枇杷麻呂」

一才「浅草文庫」

【刊年・刊行者】

八二才の刊記は以下の通り。

「慶安貳己丑年仲春良辰」藤井吉兵衛尉新刊」

藤井吉兵衛は京の書肆。慶安元年には『鉄槌』（青木宗胡）を刊行している。

【五】あた物かたり 寛永一七年刊 二冊

和学講談所旧蔵 「請求番号…二〇四・〇〇九九」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、一五八頁、二〇一四年）参照のこと

【六】可笑記 寛永一十九年刊 五冊

和学講談所旧蔵 「請求番号…一九〇・〇一九〇」

本資料は如儡子による仮名草子『可笑記』の寛永一十九年刊本。袋綴。五冊。

『徒然草』に倣った随筆風作品で、話題は社会・政治・道德・故事・教訓・経験など多岐にわたって、およそ二八〇項目に分けて意見・批評を述べる。特に世相批判には同時代の浪人の視点が見て取れ、本作品における特徴ともなっている。

如儡子は本名を斎藤親盛といい、出羽山形藩主最上家に仕えたが、最上家改易をきっかけに浪人となり、長く不遇を託った。本資料は江戸で医者として生計を立てていたころに成立。寛永一三年に刊行され、続いて一九年にも刊行。万治二年には絵入り版も刊行されている。

本資料は各冊一才の「和学講談所」の蔵書印から、和学講談所の旧蔵であるとわかるが、各冊本文末尾には「海宗」（直径一・二糎）の墨印があり、これが本来の旧蔵者の印と思われる。ただし、詳細は不明。

題簽はほとんどが欠けている。一冊目の題簽は後補。三冊目に元題簽「可笑記 ■三」（四周双边刷題簽、一六・五糎×三・五糎）がかかるように残るが、一部欠けている上、「三」の部分は墨書。

五冊目の見返しに旧蔵者の手によるものと思われる付箋（二一・五糎×一五・五糎）あり。

【書誌】

外題・①「可笑記 一」四周双边刷題簽（二七・〇糎×三・八糎）に墨書、②欠、③「可笑記 ■三」四周双边刷題簽（一六・五糎×三・五糎）※「三」のみ墨書、④⑤欠

内題・「可笑記」

表紙・栗皮表紙（二八・〇糎×一八・三糎）

見返し・⑤付箋（二二・五糎×一五・五糎）あり

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉二一行

字面高さ・二一・五糎

匡郭・四周单边（二一・五糎×一五・五糎）

墨付丁数・①五四丁、②五八丁、③五四丁、④五九丁、⑤八五丁

印記・各冊一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」

「内閣文庫」

各冊末尾「内閣文庫」

①五四才、②五八ウ、③五四才、④五九ウ、⑤八五ウ「海宗」（直

径一・二糎、円型墨印）

【刊年・刊行者】

⑤八五ウにある刊記は以下の通り。

「寛永壬午季秋吉日刊行」

これにより寛永一九年の刊行とわかるが、書肆については不明。

【七】大坂物語 刊年不明 二冊

内務省旧蔵「請求番号…一七一・〇〇四二」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、一六〇頁、

二〇一四年）参照のこと

【八】大坂物語 享保七年刊 二冊

浅草文庫旧蔵「請求番号…一七一・〇〇四二」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、一六一頁、

二〇一四年）参照のこと

【九】大坂物語 寛文八年刊 二冊

内務省地理局旧蔵「請求番号…一七一・〇〇四三」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、一六一頁、

二〇一四年）参照のこと

【一〇】大坂物語 寛文二二年刊／享保七年刊 二冊

修史館旧蔵「請求番号…一七一・〇〇四〇」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、一六二頁、

二〇一四年）参照のこと

【一一】聚楽物語 刊年不明 四冊

旧蔵者不明「請求番号…二〇四・〇一二九」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、一六三頁、

二〇一四年）参照のこと

【一二】仁勢物語 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵「請求番号…特〇六二・〇〇〇五」

本資料は仮名草子『仁勢物語』の写本。綴葉装。一冊。

『仁勢物語』は寛永一五く七年頃に成立した仮名草子で、『伊勢物語』を逐語的にもじったパロディ作品である。平安朝の優美・風雅を、近世初期の卑俗・滑稽に落とし込んで、機知に富んだおもしろさを確立している。

本資料は写年は不明ながら、比較的豪華な装丁を持つ。特徴から見ても、刊行からそれほど隔てない、近世前期の書写と推定する。

また目録では内務省旧蔵となっているが、一丁目の左下に「和学講談所」の印をかりうじて認めることができるため、この解題では和学講談所旧蔵と判断した。

小口の煤と染みの状況から、火事に遭っているものと推定される。

【書誌】

外題・「仁勢物語」中央香色地金砂子料紙題簽（二三・三糎×二・七糎）に墨書

内題・なし

表紙・紺色表紙（二四・〇糎×一七・七糎）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・斐楮混ぜ漉き

行数・每半葉一〇行

字面高さ・一九・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・六二丁

印記・一才「書籍館印」「浅草文庫」「日本政府図書」「和学講談所」

【写年・書写者】

本資料は写年・書写者ともに不明。

【一三】清水物語 寛永一五年刊 二冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号…一九三・〇五八〇」

本資料は朝山意林庵（素心）による仮名草子『清水物語』の寛永一五年版。袋綴。二卷二冊。

『清水物語』は問答の聞き書き式で、儒教道徳を説いた仮名草子。上巻に清水寺参詣の場面があることからこの題で呼ばれる。儒教的立場から仏教を批判し、当時の社会を論じた。二く三千部は販売されたと言われ、いわゆる当時のベストセラーとなった。

作者の朝山意林庵は江戸前期の儒学者で、名を素心。京に生まれ、のち豊前の細川忠利に仕えた。京に戻ってから、朝鮮使李文長に朱子学を学んだ。承応二年には、後光明天皇に『中庸』を講じている。寛文四年没。

本資料は貸本屋の旧蔵だったと思われる、複数の印記が見られる。①②表紙・裏表紙および②三四才・ウ・裏見返しに落書きがあるのもその名残であろう。

本資料は明治一五年に政府によって購入された。

【書誌】

外題・「清水物語 上(下)」左肩無地料紙刷題簽(二五・八糎×三・〇糎)

内題・「清水物語」

表紙・朱色雷文繋型押表紙(二七・八糎×一八・〇糎)

見返し・②左肩に付箋(三・〇糎×一・三糎)「体」と墨書

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉二行

字面高さ・二一・五糎

匡郭・なし

墨付丁数・①三四丁、②三四丁

印記・①一才「本善」(楕円形墨印、二・三糎×一・二糎)「横浜／谷

富」(長方朱印、三・〇糎×二・〇糎、不明長方朱印「二・三

糎×一・二糎)「図書局文庫」「日本政府図書」「明治十五年購求」

①三四ウ「日本政府図書」「図書局文庫」「本善」「横浜／谷富」

②一才「本善」「横浜／谷富」不明長方朱印(二・三糎×一・二

糎)「図書局文庫」「日本政府図書」「明治十五年購求」

②三三ウ「日本政府図書」

②三四才「図書局文庫」

②三四ウ「本善」「横浜／谷富」

【刊年・刊行者】

刊記は以下の通り。

②三四才「寛永拾五戊寅十月吉日開之」

【二四】清水物語 寛永一五年刊 二冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号…一九三・〇五七九」

本資料は前掲資料と同版本。ただし、見返し部分から本文が始まっており、裏見返し部分で本文が終わる。改装の際にこの形になったと考えられる。

本文末尾に「昌平坂学問所」の墨印あり。

【書誌】

外題・「清水物語 乾(坤)」左肩無地料紙刷題簽(一七・五糎×三・三糎)

内題・「清水物語」

表紙・栗皮表紙(二七・五糎×一七・五糎)

見返し・①本文はじまり、②裏見返しで本文おわり

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉二行

字面高さ・二一・五糎

匡郭・なし

墨付丁数・①三四丁、②三四丁

印記・①一才「日本政府図書」「浅草文庫」

①三四ウ「昌平坂学問所」

②一才「日本政府図書」「浅草文庫」

②三四ウ「昌平坂学問所」

【刊年・刊行者】

刊記は以下の通り。

②三四才「寛永拾五戊寅十月吉旦開之」

【二五】むさしあふみ 万治四年刊 一冊

和学講談所旧蔵「請求番号：一六六・〇四二」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、一六四頁、二〇一四年）参照のこと

【二六】むさしあふみ 万治四年刊 二冊

内務省地理局旧蔵「請求番号：一六六・〇四八」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、一六五頁、二〇一四年）参照のこと

【二七】女郎花物語 「江戸初期」写 二冊

和学講談所旧蔵「請求番号：二〇四・〇一〇二」

本資料は仮名草子『女郎花物語』の写本。袋綴。二巻二冊。

『女郎花物語』は紫式部をはじめとした王朝時代の賢女の逸話を紹介し、当代の女性への教訓を述べる。万治四年に三巻三冊で刊行されているが、写本と内容が異なっている。まず写本が成立し、意図的に改編されて刊行されたことが指摘されている（森山茂「女郎花物語の変遷（二）」写

本から板本へ」『宇部短期大学学術報告』第九号、一九七三年・同「女郎花物語の変遷（二）」写本・板本両系統における説話編集の相違について」『尾道短期大学研究紀要』第一八号、一九七九年。

作者については跋文に「藤原氏女」とあるが、北村季吟の匿名とも考えられている。文禄・慶長頃の成立（佐藤りつ「女郎花物語考」『王朝文学』第一五号、一九六八年）。

本資料は紺色の帙（二八・〇糎×二〇・〇糎×三・〇糎）入り。左肩に無地の題簽（一九・二糎×三・八糎）で「女郎花物語」と墨書されている。

本資料には「和学講談所」の朱印があり、和学講談所旧蔵であることがわかる。

【書誌】

外題・「女郎花物語」左肩打付朱書

内題・「女郎花物語」

表紙・紺色表紙（二七・三糎×一九・三糎）

遊紙・扉のあとに一丁

扉・①「女郎花 上」、②「みやうなり日本紀にいはく／女郎花 下」

料紙・楮紙

行数・每半葉二〇行

字面高さ・二二・五糎

匡郭・なし

墨付丁数・①七〇丁、②六一丁

印記・①二才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」

②二才「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」

【写年・書写者】

写年・書写者については不明。筆跡等から鑑みて江戸時代初期～前期か。

【一八】女郎花物語 写年不明 二冊

堀氏花洒家文庫旧蔵 「請求番号：二〇四・〇一〇一」

本資料は前掲資料と同じ『女郎花物語』の写本。袋綴。二巻二冊。

本資料は各冊見返しに「花洒家文庫」の印があり、須坂藩主堀直格の旧蔵であることがわかる。また各冊裏見返しには「墨阪十一代主写蔵記」の印が見られる。これは堀直格が自ら謄写したものに多く見られる印で、本資料も直格の筆であると推察される。

明治一三年に政府によって購入された。

【書誌】

外題・「女郎花物語」 砥粉色地金捺箔料紙題簽（一八・三糎×三・〇糎）に墨書

内題・「女郎花物語」

表紙・香色地横刷毛目表紙（二六・〇糎×一八・一糎）

見返し・①②「花洒家文庫」、裏見返し・①②「墨阪十一代主写蔵記」

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二・二・五糎

匡郭・なし

墨付丁数・①六八丁、②六〇丁

印記・①一才「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十三年購求」

①六八ウ「大日本帝国図書印」

②一才「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十三年購求」

②六〇ウ「大日本帝国図書印」

【写年・書写者】

写年についてははっきりしないが、裏見返しの「墨阪十一代主写蔵記」の印から堀直格自筆と推定される。

【一九】女郎花物語 写年不明 一冊

伴直方旧蔵 「請求番号：二〇四・〇一〇〇」

本資料は前掲資料と同じ『女郎花物語』の写本。袋綴。一冊。

本資料で最も特徴的なのは、伴直方手校本であるという点である。全体にわたって朱書の書入れがあり、本文末尾にはやはり朱書で「天保十一年庚子正月八日一校畢 伴直方」とある。第一丁目にも「伴氏家印」の朱印があり、伴直方の手元にあったことは疑いない。

ただし見返しに不明方形印「□□文庫」（二・五糎×二・五糎）（※やや不鮮明）があり、伴直方以前の旧蔵者の印の可能性もある。

なお本文末尾には「昌平坂学問所」の墨印があり、伴直方の手元を離れて昌平坂学問所に新収されたことが伺える。

【書誌】

外題・「女郎花物語 全」 縹色料紙題簽（一七・五糎×三・八糎）に墨書

内題・「女郎花物語」

表紙・香色地格子刷毛目表紙（二七・〇糎×一八・〇糎）

見返し・不明印記「□□文庫」（二一・五糎×二一・五糎）あり

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉二二行

字面高さ・二二・五糎

匡郭・なし

墨付丁数・五八丁

印記・見返し「□□文庫」（二一・五糎×二一・五糎）、一オ「伴氏家印」「内閣文庫」「日本政府図書」「浅草文庫」、五八ウ「昌平坂学問所」「内閣文庫」「元治甲子」

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。伴直方が校正した天保二一年以前の書写である。

【二〇】因果物語 寛文元年序刊 三冊

和学講談所旧蔵 「請求番号…二二一・〇〇八三」

本資料は鈴木正三による仮名草子『因果物語』の寛文元年版本。袋綴。三卷三冊。

『因果物語』は仏教唱導のため、諸国の怪異譚・因果譚を収集して因果応報を説いたもの。『二休諸国物語』『沙石集』と関連する内容も少なくない。

い。教訓的な内容が本来の趣旨であったが、説話文学的な怪談・奇談に関心が寄せられ、近世怪異小説の先駆的存在となった。

鈴木正三は三河の人で、徳川家康の家臣だったが、のち出家し、民衆教化のためにさまざまな仏書を記した。その中には仮名草子『二人びく』などが存在する。

序文によれば、本資料は正三の没後、弟子たちによって編纂され、寛文元年に刊行された。漢字片仮名交じり本。ほかに、寛文年刊に刊行された漢字平仮名交じり本もある。

本資料は蔵書印から見て「和学講談所」の旧蔵だったことがわかるが、③一オ右下に長方陰刻印「長得院」（四・五糎×二一・〇糎）の印記があり、寺社の旧蔵とも考えられる。また三冊目のほかこの印が見られないことから、取り合わせ本の可能性も考えられる。

【書誌】

外題・①「新刻／因果物語 上」左肩四周双边刷題簽（二七・六糎×三・七糎）に「上」のみ墨書、②新刻／因果物語 中」四周双边刷題簽（一七・六糎×三・七糎）に「中」のみ墨書、③欠

内題・「因果物語」

表紙・紺色表紙（二六・八糎×一九・三糎）

遊紙・①一丁

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉二二行

字面高さ・二〇・八糎

匡郭・四周单边（二〇・八糎×一五・五糎）

墨付丁数・①二六丁、②二七丁、③二五丁

印記・①一才「書籍館印」 「浅草文庫」 「日本政府図書」 「和学講談所」
②一才「書籍館印」 「浅草文庫」 「日本政府図書」 「和学講談所」
③一才「書籍館印」 「浅草文庫」 「日本政府図書」 「和学講談所」
「長得院」

【刊年・刊行者】

刊記は二か所、以下の通り。

②二七ウ「寛文元年辛丑季蠟月上旬日助縁開刊」

③二五ウ「山本平左衛門」

ほか序文の内容でも寛文元年刊行であることがわかる。

「山本平左衛門」は、京の書肆秋田屋兵左衛門のことである。京寺町通蛸薬師下ル。

【二二】二人びくに 寛文四年刊 二冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇七五」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、一六七頁、二〇一四年）参照のこと

【二二】花の縁物語 寛文六年頃刊 二冊

百井為衡旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇八〇」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、一六八頁、二〇一四年）参照のこと

【二三】さんげ物語 天和二年刊 三冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇六七」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、一六九頁、二〇一四年）参照のこと

【二四】竹斎療治之評判 貞享二年刊 一冊

静岡学問所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇八九」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、一七〇頁、二〇一四年）参照のこと

【二五】頼朝三代記 宝永六年刊 四冊

内務省旧蔵 「請求番号：二〇四・〇一〇五」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、一七二頁、二〇一四年）参照のこと

【二六】織唐衣 宝永三年刊 六冊

内藤家旧蔵 「請求番号：一九〇・〇二六九」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、一七二頁、二〇一四年）参照のこと

【二七】新著聞集 寛延二年刊 六冊

浅草文庫旧蔵 「請求番号：二二一・〇〇八六」

本資料は一雪による『新著聞集』の寛延二年版。袋綴。十八卷六冊。
奇談・雑談などを、忠孝・慈愛・酬恩・報仇・崇行・勝蹟・勇烈・俊奸・
崇厲・奇怪・執心・冤魂・往生・殃禍・才智・清直・俗談・雑事の十八編
目に分け、総計三七六話を掲載する。墨伝説など著名な説話を含む。

宝永元年に俳人の一雪が記した『続著聞集』を、紀伊和歌山藩士神谷朝
英（養勇軒）が改編し、寛延二年に出版したもの。幕末まで繰り返し刷
られており、近世を通して広く読まれていたことが伺える。作者の一雪は
俳人で、松永貞徳、山本西武に学んだ。俳書・説話集を多く編み、説話集
については本書のほかに『古今大著聞集』などがある。墨伝説の初出と指
摘され（松田修「犬著聞集管見」『西鶴研究』第四号、一九五一年）、改編
によって『続著聞集』『新著聞集』に繋がっていった（田中葉子『新著聞
集』の成立——『犬著聞集』『続著聞集』との関連から）『語文研究』第六
二号、一九八六年）。

井原西鶴の作品に共通する説話も多い（井上敏幸『新著聞集』『日本古典
文学大辞典』）。

本資料は「日本政府図書」「浅草文庫」の印があるのみで、浅草文庫以前
の旧蔵者に関する手がかりはない。

【書誌】

- 外題・「新著聞集 一（〜六）」左肩無地料紙刷題簽（一七・二糎×三・
三糎）
内題・「新著聞集」
表紙・縹色地波千鳥文様型押表紙（二六・〇糎×一八・二糎）
遊紙・各冊一丁

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二一・三糎

匡郭・四周単辺（二一・三糎×一五・五糎）

墨付丁数・①六四丁、②七九丁、③六五丁、④五二丁、⑤九二丁、⑥五
七丁

印記・①一才「浅草文庫」「日本政府図書」

②一才「浅草文庫」「日本政府図書」

③一才「浅草文庫」「日本政府図書」

④一才「浅草文庫」「日本政府図書」

⑤一才「浅草文庫」「日本政府図書」

⑥一才「浅草文庫」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

刊記については以下の通り。

⑤五七ウ「寛延式己巳三月吉旦」

【二八】新著聞集 寛延二年刊 六冊

教部省旧蔵 「請求番号：二二一・〇〇八四」

本資料は前掲資料の同版本。袋綴。一八卷六冊。

本資料は蔵書印から見て教部省の旧蔵だが、右下に不明方形陰刻印
（三・〇糎×三・〇糎）があり、これが元の旧蔵者のものと推察される。

また本資料の場合、各冊一丁目はすべて共通して「宣教使」教部省文庫

印」「図書局文庫」「太政官文庫」不明方形陰刻印（三・〇糎×三・〇糎）の五種類が捺されているが、本文末尾は冊次によって捺印箇所にはらつきがある。

【書誌】

外題・①⑥「新著聞集 一（一六）」左肩無地料紙刷題簽（一七・五糎×三・三糎 ※③欠

内題・「新著聞集」

表紙・縹色表紙（二六・〇糎×一七・六糎）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二一・三糎

匡郭・四周单边（二一・三糎×一五・五糎）

墨付丁数・①六四丁、②七九丁、③六五丁、④五二丁、⑤九二丁、⑥五七丁

印記・①一才「宣教使」「教部省文庫印」「図書局文庫」「太政官文庫」不

明方形陰刻印（三・〇糎×三・〇糎）、六三ウ「日本政府図書」、

六四才「図書局文庫」「内閣文庫」

②一才「宣教使」「教部省文庫印」「図書局文庫」「太政官文庫」不

明方形陰刻印（三・〇糎×三・〇糎）、七八ウ「日本政府図書」、

七九才「図書局文庫」「内閣文庫」

③一才「宣教使」「教部省文庫印」「図書局文庫」「太政官文庫」不

明方形陰刻印（三・〇糎×三・〇糎）、六四ウ「日本政府図書」六

五才「内閣文庫」六五ウ「図書局文庫」

④一才「宣教使」「教部省文庫印」「図書局文庫」「太政官文庫」不明方形陰刻印（三・〇糎×三・〇糎）、五二ウ「日本政府図書」「図書局文庫」「内閣文庫」

⑤一才「宣教使」「教部省文庫印」「図書局文庫」「太政官文庫」不明方形陰刻印（三・〇糎×三・〇糎）、九二才「図書局文庫」「内閣文庫」

⑥一才「宣教使」「教部省文庫印」「図書局文庫」「太政官文庫」不明方形陰刻印（三・〇糎×三・〇糎）、五六ウ「日本政府図書」、五七才「図書局文庫」「内閣文庫」

【刊年・刊行者】

刊記については以下の通り。

⑤五七ウ「寛延貳己巳三月吉旦」

【二九】新著聞集 寛延二年刊 六冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号…二二一・〇〇八五」

本資料は前掲資料の同版本。袋綴。一八卷六冊。

本資料の表紙右肩に昌平坂学問所の「漫録」の分類表が貼られていることから、昌平坂学問所の旧蔵だったことが推察される。それ以前には、貸本屋の所蔵だったのか、各冊一丁目右肩に墨印が捺されている。一冊目のみ「ヤマヤ」の屋号の印。二冊目以降は篆書体の陽刻方形印（一・〇糎×一・〇糎）が見られる。

【書誌】

外題・①「新著聞集 一式三」無地料紙題簽（二〇・二糎×三・五糎）
に墨書、②④欠、③⑤⑥「新著聞集」朱色唐草文様刷題簽（一八・三糎×三・六糎）

内題・「新著聞集」

表紙・縹色表紙（二六・三糎×一八・〇糎）

見返し・①左下「日本政府図書」蔵書表貼付

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・毎半葉九行

字面高さ・二一・三糎

匡郭・四周单边（二一・三糎×一五・五糎）

墨付丁数・①六四丁、②七九丁、③六五丁、④五二丁、⑤九二丁、⑥五七丁

印記・①一才「日本政府図書」「ヤマヤ」六四才「日本政府図書」

②一才「日本政府図書」不明陽刻方形墨印（一・〇糎×一・〇糎）
七九才「日本政府図書」

③一才「日本政府図書」不明陽刻方形墨印（一・〇糎×一・〇糎）
六五ウ「日本政府図書」

④一才「日本政府図書」不明陽刻方形墨印（一・〇糎×一・〇糎）
五二ウ「日本政府図書」

⑤一才「日本政府図書」不明陽刻方形墨印（一・〇糎×一・〇糎）
九二才「日本政府図書」

⑥一才「日本政府図書」不明陽刻方形墨印（一・〇糎×一・〇糎）
五七才「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

刊記については以下の通り。

⑤五七ウ「寛延貳己巳三月吉旦」

【三〇】本朝桜陰比事 元禄二年刊 五冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号：二二一・〇〇五八」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、一七三頁、
二〇一四年）参照のこと

【三一】本朝桜陰比事 元禄二年刊（享保頃後印） 五冊

尾張藩寺社奉行所旧蔵「請求番号：二二一・〇〇五九」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、一七四頁、
二〇一四年）参照のこと

【三二】ゑぼうの「かぐみ草」 元禄六年刊 一冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号：二〇四・〇〇八八」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、一七五頁、
二〇一四年）参照のこと

【三三】棠大門屋敷 宝永二年刊 一冊

青山堂枇杷麿旧蔵「請求番号：二〇四・〇一〇九」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」 解題②」『北の丸』四六号、一七六頁、二〇一四年）参照のこと

【三四】鎌倉繁栄伝記 延享二年 一二冊

旧蔵者不明「請求番号：二〇四・〇一〇四」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」 解題③」『北の丸』四七号、一四〇頁、二〇一五年）参照のこと

【三五】諸道聴耳世間猿 明和三年刊 五冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号：二〇四・〇一三四」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」 解題③」『北の丸』四七号、一四一頁、二〇一五年）参照のこと

【三六】隅田河鏡池伝 寛延四年刊 五冊

内務省旧蔵「請求番号：二〇四・〇一〇一〇」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」 解題③」『北の丸』四七号、一四二頁、二〇一五年）参照のこと

【三七】坂東忠義伝 安永四年刊 一五冊

内務省旧蔵「請求番号：一七一・〇〇二七」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」 解題③」『北の丸』四七号、一四四頁、二〇一五年）参照のこと

【三八】絵本太閤記 明治一五年刊 六冊

太政官記録局旧蔵「請求番号：二〇四・〇一三〇」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」 解題③」『北の丸』四七号、一四五頁、二〇一五年）参照のこと

【三九】平泉実記 写年不明 六冊

安西雲煙旧蔵「請求番号：二〇四・〇一一五」

本資料は前編文政四年刊・後編同五年刊の読本『絵本平泉実記』の写本。一二巻六冊。作者は速水春暁斎。

相原友直による軍書『平泉実記』が典拠と考えられてきたが、ほかにも通俗軍書『東実記』のうち『奥州征伐記』部分からも引用されていることが指摘されている（藤沢毅『絵本平泉実記』の典拠『文教国文学』第三八・三九号、一九九八年）。通俗的・娯楽的な内容が特徴で、奥州藤原氏の歴史を描く。

①④⑥見返し部分に長方陽刻墨印「子孫永保／共二十五巻／雲煙家蔵書記」（七・〇糎×五・〇糎）が捺されている。これは江戸時代後期の書画鑑定家だった安西雲煙の蔵書印である。

また裏表紙右下には①②「濱野／和泉利」③④⑤「濱野村／和泉利」⑥「濱野駅／和泉利」の墨書がある。

【書誌】

外題・「平泉実記 壹式（十一拾二）」四周单边刷題簽（一八・三糎×三・八糎）に墨書

内題・「平泉実記」

表紙・香色表紙（二四・〇糎×一七・〇糎）

見返し・①④⑤長方陽刻墨印「子孫永保／共二十五卷／雲煙家藏書記」

（七・〇糎×五・〇糎）

遊紙・⑤冒頭に二丁、⑥三七丁目と三八丁目のあいだに二丁

扉・①「平泉実記／卷二」②「平泉実記／卷五」④「平泉実記／卷之七」

⑥「平泉実記／卷之十一」

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二一・三糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①六八丁、②六九丁、③六九丁、④六六丁、⑤七一丁、⑥八一丁

印記・①一オ「大日本帝国図書印」「日本政府図書」六八ウ「大日本帝国

図書印」

②二オ「大日本帝国図書印」「日本政府図書」六九ウ「大日本帝国図書印」

③二オ「大日本帝国図書印」「日本政府図書」六八ウ「大日本帝国図書印」

④二オ「大日本帝国図書印」「日本政府図書」六六ウ「大日本帝国図書印」

⑤一オ「大日本帝国図書印」「日本政府図書」七一ウ「大日本帝国図書印」

【写年・書写者】

写年・書写者については不明。

【四〇】源氏一統志 弘化三年刊 五冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：一七一・〇〇〇五」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題③」『北の丸』四七号、一四六頁、二〇一五年）参照のこと

【四二】俊傑神稲水滸伝 明治一五年 五冊

太政官記録局旧蔵 「請求番号：二〇四・〇一三二」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題③」『北の丸』四七号、一四八頁、二〇一五年）参照のこと

【四二】鎌倉年代図会 天保一五年刊 五冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇一〇三」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題③」『北の丸』四七号、一四九頁、二〇一五年）参照のこと

【四三】絵本貞越軍談 明治一五年刊 一〇冊

太政官記録局旧蔵「請求番号：二〇四・〇一三二」
※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題③」『北の丸』四七号、一五〇頁、二〇一五年）参照のこと

【四四】絵本豊臣勲功記 明治一五・一七年刊

太政官記録局旧蔵「請求番号：二〇四・〇一二八」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題③」『北の丸』四七号、一五二頁、二〇一五年）参照のこと

【四五】南朝外史武勇伝 明治一六年刊 五冊

太政官記録局旧蔵「請求番号：二〇四・〇一二六」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題③」『北の丸』四七号、一五三頁、二〇一五年）参照のこと

【四六】日本国開闢由来記 万延元年刊 七冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号：二〇四・〇一四〇」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題③」『北の丸』四七号、一五四頁、二〇一五年）参照のこと

【四七】日本国開闢由来記 明治刊 四冊

飯田春教旧蔵「請求番号：二〇四・〇一四二」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題③」『北の丸』四七号、一五五頁、二〇一五年）参照のこと

【四八】日本国開闢由来記 明治刊 四冊

元老院旧蔵「請求番号：二〇四・〇一三九」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題③」『北の丸』四七号、一五六頁、二〇一五年）参照のこと

【四九】白猿物語 写年不明 一冊

内務省旧蔵「請求番号：二〇四・〇一八六」

本資料は荷田在満の手による読本『白猿物語』の写本。袋綴。一冊。

『白猿物語』は中国晋唐小説『白猿伝』を典拠にした雅文体の物語。

野猿の棲む島に漂着した男が、白猿と交わり子までもうけるが、やがてやってきた船に飛び乗って帰国しようとする。それを見た猿たちは嘆いて子らと共に海に身を投げる。

作者は荷田在満。国学者荷田春満の甥でその跡を継いだ。享保・元文頃は田安宗武に仕えている。代表的な著作に『大嘗会儀式具釈』『国歌八論』などを挙げることができる。

編者は清水浜臣（月齋）。江戸の国学者で、『月齋雑考』『宇津保物語考証』などの著作がある。『白猿物語』は自身の叢書『泉門遺稿』第四集に収めて刊行した。

本資料は清水浜臣の奥書のみ朱書。

修復の手が入っており、裏打ちの紙が目立つ。

【書誌】

外題・「白猿物語」 左肩無地料紙題簽（二六・五糎×三・三糎）に墨書

内題・「白猿物語」

表紙・横刷毛目表紙（二六・五糎×一八・五糎）

遊紙・冒頭二丁、末尾二丁

扉・なし

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二〇・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・七丁

印記・一才「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

七ウ「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

【写年・書写者】

本資料の写年・書写者については未詳。

【五〇】しみのすみか 写年不明 一冊

岸本由豆流旧蔵 「請求番号：二〇四・〇一七九」

本資料は石川雅望の手による雅文体笑話集『しみのすみか物語』の自筆稿本。袋綴。二巻一冊。

時代を平安時代に設定し、『宇治拾遺物語』の体裁、文体を模して滑稽みのある小話五四を集めたもの。文化二年（一八〇五）には、司馬級の絵入

りで出版されている。版元の広告によれば、初学者のための和文創作の手本としての一面も持っていた。

序文によれば、旅人たちが話す笑話をまとめ漢文で記したものを、のちに仮名に改めたという。もともと石川雅望は、狂名を宿屋飯盛と称した通り、日本橋小伝馬町の宿屋糠屋に生まれ、そこで当時話されていた笑話の数々を収集したということらしいが、戯作者・国学者と多く交流した雅望は彼らからも小咄を集めることができたようである。したがってその典拠は広く流布していた江戸小咄や中国笑話集がほとんどである（武藤禎夫「雅文笑話と江戸小咄——『しみのすみか物語』の典拠——『共立女子短期大学文科紀要』二六号、一九八三年）。

本資料の冒頭部分には「朝田家蔵書」の印があり、岸本由豆流の旧蔵であったことがわかる。版本の跋文によれば、岸本由豆流は本資料を預かり、永楽屋東四郎からの出版を斡旋したという。のち修史館の所蔵となった。

本資料は香色の帙（二四・〇糎×一七・〇糎×二・〇糎）入り。左肩に無地料紙題簽（二五・八糎×二・八糎）に「しみのすみか」と墨書してある。

【書誌】

外題・「しみのすみか物語」左肩無地料紙題簽（二七・〇糎×三・二糎）に墨書

内題・「しみのすみか」

表紙・香色布目表紙（二三・五糎×一六・〇糎）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・毎半葉一〇行

字面高さ・一九・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・六一丁

印記・一才「館図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」「朝田家蔵書」

六一ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料は石川雅望自筆本である。写年は詳細不明ながら、版本の序文によると享和二年に成立したようである（森銑三「しみのすみか物語鑑賞」『国文学・解釈と鑑賞』六一二号、一九四一年）。

【五一】醒睡笑 写年不明 八冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇一三五」

本資料は安楽庵策伝による断本『醒睡笑』の写本。八卷八冊。袋綴。「内閣文庫本」と通称されるものである。

作者策伝が長年にわたって収集した説経用の笑い話を、京都所司代板倉重宗の勧めで八冊四十二項目分類編集した。寛永五年に浄書を終え、重宗に献呈。現存本はこの献呈本からの転写本である。

系統としては、千三十余話を収める広本系、三百余話に減らした狭本系がある。本資料は広本系の代表的なものである。東京大学図書館所蔵本と行数・字数・字形が相似しており、同系統と考えられる（菅井時枝「醒睡笑」の諸本について『中央大学国文』一一号、一九六七）。

説教用とはいえ、茶席で興じたようなものや、民間伝承など、各種多様な笑い話が収録されている。後世の断本や落語に影響を与えたことから、断本の始祖とされる。

策伝は美濃の人で、幼くして寺に入った。山陽各地で布教活動を行い、諸寺を創建・再建。慶長一八年に京都誓願寺法主となる。元和五年に紫衣勅許。退住してからは小堀遠州を師として茶室安楽庵を営んだ。松永貞徳とも交流が深く、和歌・狂歌に通じた（鈴木棠三『安楽庵策伝ノート』一九七三年、鈴木棠三「安楽庵策伝」『日本古典文学大辞典』）。

本資料は、表紙の二種類の墨印から昌平坂学問所旧蔵ということがわかる。また昌平坂学問所が分類に用いていた「漫筆雑考」の票が第六目の見返しに貼付されて遺っている。

第三冊目の見返しに鉛筆による落書きあり。

【書誌】

外題・①左肩朱打付書の跡あり、②③⑤⑥欠、④⑦⑧「醒睡笑 四（七・

「八」止）左肩四周双边刷題簽（一九・五糎×三・〇糎）

内題・「醒睡笑」

表紙・香色地横刷毛目表紙（二七・〇糎×一八・〇糎）

見返し・③表裏ともに落書あり「喚起秦皇焚之／如是書不可不焚／活々斎書」等、⑥「漫筆雑考」の貼付あり

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮

行数・毎半葉九行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①七七丁、②五三丁、③五二丁、④六七丁、⑤七〇丁、⑥六六丁、⑦五九丁、⑧六八丁

印記・①⑧表紙右肩「番外書冊」右下「昌平坂」

①一才「大学蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」、七七ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

②一才「大学蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」、二才「日本政府図書」「内閣文庫」、五三ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

③一才「大学蔵書」「浅草文庫」、二才「日本政府図書」「内閣文庫」、五二ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

④一才「大学蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」、二才「日本政府図書」「内閣文庫」、六七ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

⑤一才「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」、二才「日本政府図書」「内閣文庫」、七〇ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

⑥一才「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」、二才「日本政府図書」「内閣文庫」

⑦一才「大学蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」、二才「日本政府図書」「内閣文庫」、五八ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

⑧一才「大学蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」、二才「日本政府図書」「内閣文庫」、二才「日本政府図書」「内閣文庫」、六七ウ「日本政府図書」「内閣文庫」

【写年・書写者】

寛永五年の元奥書のほかは、写年・書写者の記載はない。

【五二】醒睡笑 刊年不明 三冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇一三三」

本資料は前掲資料広本系（写本）『醒睡笑』に対し、略本系（刊本）『醒睡笑』巻八を欠く。

略本系（刊本）には、寛永年間版、慶安元年版、慶安二年版、万治元年版などがあるが、本資料は刊記を欠き、刊年・刊行者については不明。

本資料は捺されている墨印から和学講談所旧蔵とわかる。

【書誌】

外題・「醒睡笑 上（中・下）」左肩四周双辺刷題簽（一四・〇糎×三・〇糎）に墨書

内題・「醒睡笑」

表紙・紺色表紙（二九・五糎×一四・〇糎）

遊紙・①一丁才「和学講談所」墨印あり

扉・なし

料紙・楮

行数・每半葉九行

字面高さ・一五・七糎

匡郭・四周単辺（一五・七糎×一二・〇糎）

墨付丁数・①五三丁、②六九丁、③二二丁

印記・①遊紙「和学講談所」、一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」

②一才「浅草文庫」「和学講談所」

③なし

【刊年・刊行者】

本資料は刊記を欠くため、刊年・刊行者ともに未詳。

【五三】百物語 万治二年刊 二冊

石塚豊芥子旧蔵「請求番号：二〇四・〇〇七四」

本資料は仮名草子『百物語』の万治二年版。袋綴。二巻二冊。題から受ける印象とは異なり、怪談集ではなく笑話集である。

『醒睡笑』同様、一般に流布していた噺を収集したもので、全部で百話から成る。歌人・詩人にまつわる逸話が多く、室町〜江戸時代初期までの諸書に類話が見られる(岡雅彦『百物語』『日本古典文学大辞典』)。五山にまつわる話も多く、作者は五山僧もしくはそれに近い人物と想定されている。『醒睡笑』同様、説教・説経に引用された巷談説話に源流を持つものと思われる(前田金五郎『近世初期笑話の一流流』『国語と国文学』五〇・二号、一九七三年)。

本資料の序文にあたる上巻冒頭三丁のみ補写。

本資料は「石塚文庫」「豊芥(象)」などの印から、蔵書家として知られる石塚豊芥子の旧蔵だったことがわかる。また「不羈斎図書記」の印から、元文部官僚で教育者の秋山恒太郎の手に渡ったことも窺える。明治十三年に政府によって購入された。

【書誌】

外題・「万治旧板／百物語 上(下)」左肩打付墨書

内題・百物語

表紙・縹色表紙(二五・〇糎×一七・〇糎)

遊紙・①一丁、②二丁(裏遊紙に「大日本帝国図書印」の印記あり)
扉・なし

料紙・楮

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・四周单边(二二・〇糎×一五・五糎)

墨付丁数・①三〇丁、②三四丁

印記・①一才「不羈斎図書記」「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十三年購求」「豊芥(象)」、三〇ウ「大日本帝国図書印」「石塚文庫」「待償」(一・〇糎×〇・五糎、楢円陽刻印)「大橋」(一・

二糎×〇・七糎、楢円陽刻印)

②一才「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十三年購求」「不羈斎図書記」「豊芥(象)」、三四ウ「日本政府図書」「大日本帝国図書印」「石塚文庫」、裏遊紙「大日本帝国図書印」

【刊年・刊行者】

②三四ウの刊記は一部欠けている。

「千時萬治式曆初夏上旬／松長伊右衛■」

松長(松永)伊右衛門は京の書肆で、本資料のほかに浅井了意の寛文五年版『大倭二十四孝』を刊行している。

(調査員)